

夏の日の煙、よろぼう◇とされく△、かなたの断章

「その旅館は、楽園のように思え、女中(メイド)たちも天女のような感じだった。」

「緑の大きな岩山と岩山の間に、港の開き口があり——その向こうにある地平線にはきらきらした夏の輝きがあった。水平線の辺りには、古い記憶のように、山々の影がぼんやりとしている。灰色の町と黄色い舟と緑の崖の他は、みんな青色であった。」

小泉八雲『夏の日の夢』(林田清明 訳、青空文庫 2022 [Lafcadio Hearn “Out of the East : Reveries And Studies In New Japan”, 1895])

かつて不知火町と呼ばれた土地を訪れると決まって、同じ宇土半島の西の端、三角港にあった旅館「浦島屋」での描写から始まる、ラフカディオ・ハーンが1893年に書いたエッセイを読みました。夏の海や空が放つ「青」のイメージが異常に鮮やかで、「浦島太郎」の物語をめぐる様々な思索や夢想、記憶、感情を描いています。読むほどに、自他の今と昔、お伽話と現実がユニークに入り混じり、合流しながらも、「抽象の煙」のかなたにかすんでいく……、そんなつかみえない印象も感じました。

到着して、三角港からは東の方面、不知火町松合の海沿いにある旅館「松錦館」に泊まりましたが、ハーンのエッセイのイメージに頭をほとんど占拠されたまま、眺める雨の不知火海はとても静かで白く、今度は「白」の幻想の中に入りこみ、僕の中の現在と過去、お伽話と現実が、地域のそれらとの間で穏やかに合流しはじめ、次第に大きくなる波や太鼓の幻聴とともに、分裂した演劇みたく奇妙に変成していくような気がしました。夜が訪れると一転、それらは黒い海にゆらめく「不知火」[毎夏の八朔(今の8月下旬)夜ふけ、不知火海に現れるという蜃気楼現象]のファントムへとなり変わり、にわかに赤みを帯びて、かなたへの思いをさらにかき立てました。

そうした合流や変成の道行きをうまく語るができないので、ここではとにかく、主だった要素を並置しようと思います。

▷ある時、ずっと家にあったが読まずに置いていた、石牟礼道子さんの『苦海浄土 わが水俣病』(講談社 2004)が急に気になり、一気に読み終えた。その有無をいわず強度を実感し、これはいつか制作活動の中でアプローチしたいけど、内容上、興味だけで扱うのは無理な……とあきらめていた矢先に、ここ不知火美術館・図書館での展示の依頼があった。「不知火」は石牟礼さんを象徴する言葉といってよく、どこからか必然性を頂いた気がして、迷わず「やります」と答え、題材のひとつは石牟礼さんの文学とすぐに決めた。その後、『椿の海の記』(河出書房新社 2013)、『あやとりの記』(福音館書店 2009)、『愛情論初稿』(『石牟礼道子全集 不知火 第一巻』藤原書店 2004: 以下『全集 第一巻』と表記)をはじめ、エッセイ・対談・絵本、『新作能 不知火』(平凡社 2003 / 書籍+DVD+上演詞章)、『新作能 沖宮』(求龍堂 2019 / DVDブック)など石牟礼さんや水俣関連の映画・映像を、時間の許すかぎり読み、観つづけた。

「荒けずりな山道を萩のうねりがつつみ、うねりの奥まる泉には野ぶどうのつるがたれ、野ぶどうでうすく染まった唇と舌をひらいて、ひとりの童女が泉の中をのぞいていました。肩の後に夕陽がひかり、光の線は肩をつつみ、肩の上はやわらかく重く、心の一番奥の奥までさするように降りてくる身ぶるいでした。そのあまがなさに注ぐように童女はつわぶきの葉をつぼめてしきりに水をのむ。」「(お伽話 への文序章) (『全集 第一巻』)」

「ここにおいて海底に薫りし秘花一輪、その生涯をひと度焉るべし。父竜神とともに姉弟、空と海とを巡る生類の命脈を浄化せんとしてこれに殉ず。」「(『新作能 不知火』)」

「自然現象としての不知火に小さな頃から惹かれていた。……海の中から火が燃え出すというのは、ひじょうに凝縮された生命を感じさせる。……こうした火のイメージを人格化した女性是我ながら魅力的なものになったと思う。」「(『不知火通信』第4号 2003年12月21日)」

◇「俊徳丸伝説」(しんとく／信徳／身毒丸とも)という、僕が10年以上題材とし続けている地元・大阪が舞台の物語群がある。多くは劇中、盲目となり、ハンセン病を患い、足に障害を抱える少年が主人公で、中世以降、能楽『弱法師』や説経節『信徳丸』、歌舞伎・浄瑠璃・落語・小説や現代劇の題材として繰り返し変奏され、数々のバージョンを産んできた話だ。それを遠く熊本まで、古くは琵琶法師と呼ばれた系統の人々が比較的古い形で伝承していることを、兵藤裕己さんの著書『琵琶法師——異界を語る人々』(岩波書店 2009)で過去に読み、知っていた。「俊徳道」「俊徳町」という名称も残るものの、もはや大阪でも知らない人の方が多いであろうこの伝説を、遠い熊本では語り継いでいる人たちがいる……そのことをすぐに思い出し、題材にしよう(今までもさんざんやってきたのだが*)、これも迷いなく決めた。

「人の嫌う病がとりつきまして、あっという間に、両足が動かなくなり、両眼が見えなくなり、哀れ、しんとく丸は、病者になり果てたのでありました。ああ、いたわしいことでございます。」「(伊藤比呂美『しんとく丸』(『新説 説経節 小栗判官・しんとく丸・山椒大夫』平凡社 2015))

*拙著『まちがえる読み、いかれた挿し絵 中野裕介／パラモデル 2010-2020』(青幻舎 2021: 以下『まちがえる〜』と表記) p.13、pp.70-75、pp.94-107、pp.116-119、pp.170-179 など参照

◇僕は特に能楽『弱法師』に着目しながら、兵藤さんの『琵琶法師』を下敷きに、口頭伝承による物語こそがもつ「『我』という主語の不在において、あらゆる述語的な規定をうけいれつつ変身する」「複数の……集合的で多重化した主体の語り」といった性質、すなわ

ち、物語の意外の変容や接続・多極化を生む「可塑性 [plasticité]」への関心を、「**ぼくらの俊徳丸— About our city's glorious hero**」(初出:『季刊 大阪春秋』〈特集・東大阪とは何か〉第153号 2014年1月)というエッセイ*に書いた。

「……自分で演じていても、その発話・発語の本当の主体はどこか別のところにいる。自分が語っていても自分の声ではない。自分にとっての超越的な何かが声の主体です。」[『鼎論 声の可能性』(『思想の身体—声の巻』兵藤裕己 編著、春秋社 2007)]

「前近代的な感覚でいうなら、ものがたりは想起されるよりも、向こうからやってくる。」[兵藤裕己『物語の近代』(岩波書店 2020)]

*拙著『まちがえる〜』pp.116-119 参照

○ハーンの「耳なし芳一」への言及から始まる『琵琶法師』には、日本最後の琵琶法師とも言われた故・山鹿良之さん(芸名は玉川教演)の、琵琶による語り物『俊徳丸』についての論述や映像記録に加えて、山鹿さんならではのユニークな設定である、「俊徳丸」の母親「さよてる姫」が主人公の語り物『あぜかけ姫』の存在に関する記述もあり、気になっていたが、ネット上でその書き起こし(岩下小太郎『あぜかけ姫』『琵琶語りのコタロウ』note 2021 [琵琶語り 玉川教演、書き取り 後藤昭子])を見つけ、その具体的な内容と共に、盲僧琵琶の口伝による語り物を現代に継承する試みがあることも知る。

○兵藤裕己さんの東京での講演にて、琵琶奏者で、古典芸能・ロック・ブルーズなどあまたの音楽の垣根を超え、鬼気せまる卓越した演奏をされる後藤幸浩さん(正派薩摩琵琶)をご紹介いただく。同時期に、熊本で上述の後藤昭子さん・岩下小太郎さん(肥後琵琶乃会)ともお会いする。二人の後藤さんは立ち位置はちがえど、共に故・山鹿良之さんを直接知る琵琶奏者である。

○兵藤さんも交えたある会合で、比較文学やハーンの研究で著名な西成彦さんとお会いする(偶然だが、本展担当学芸員・里村真理さんの恩師でもある)。多くの生の「声」を身にまとい、ハーンや芳一も一緒にその場にやってきたような気配を感じた。

「複数の『声』は決して溶け混じって『合唱』になるわけではない。『声』は単独性を残しながら、他者につかり、反響を残し、新しい『声』を呼び覚まし、その全体が『集団創造』の産物へ高めあげられていく。」[西成彦『声の文学—出来事から人間の言葉へ』(新曜社 2021)]

▷石牟礼さんの初期の作品に「海と空のあいだに」という詩がある。『苦海浄土 わが水俣病』の元題で、歌集の書名でもある。松谷付近の不知火海沿岸に立つと、この土地固有の「不知火」という現象への想像をしながら、まさに遠方の「海と空のあいだ」をながめ(水俣の街も遠くその遠く彼方にかすんでいる)、様々なことに想いをめぐらす境地になる。

「漆黒の海に明滅し、あるいは燃えるが如く、あるいは流れるが如く、互いに離合集散する様は、まさしく神秘の火にふさわしい霊火である。」[『文献集 不知火』(不知火資料収集委員会 編、不知火町 1993)]

▷「道」についての、石牟礼さんの視点。

「よか町であったかどうかは今もって判断しがたいが、辺鄙な浦々の、松の影がさしている磯のかたわらに、日本窒素肥料株式会社というのがきて港が出来る。そこから村々の中にむかって道路が一本のびてゆけば、道のへりに家並が出現して、町というものの雛形が出来上がってゆく。」「道というものは、もっとも不思議なもののひとつだった。」「道というものを、あんまり先へ先へとつくと、出来上がったその道が、鎌首をもたげて動き出すのではあるまいか。」[『椿の海の記』]

◇▷僕が住む東大阪・河内地方と水俣とのつながりを、映画『水俣曼荼羅』(原一男 監督、疾走プロダクション 2020 / 映画 372分)と『水俣曼荼羅 製作ノート』(原一男+疾走プロダクション、皓星社 2021)から知る。映画の重要登場人物である、関西水俣病訴訟の当時の原告団長・川上敏行さんが東大阪の僕の自宅の目と鼻の先に住んでおられたこと、小児性患者の生駒秀夫さんもおかつて東大阪で働いておられたこと、化学薬品製造業務で有機水銀をあつかっている中で水俣病と同じ症状を発病した前田美千雄さんも東大阪在住の方であったこと。加えて、たまたま訪れた不知火町の寿司屋「錦寿司」[前述「松錦館」と併設]をいとなむ嶋谷洋一さんも、東大阪の僕の自宅近辺で働いておられたこと(その嶋谷さんの親類の嶋谷力夫さんが編集委員をつとめた『文献集 不知火』との出会いも後にあった)。いつも過ごしている東大阪・河内地方の街の眺めと不知火海の眺めがにわかに関わり、しんとく「道」と、石牟礼さんの「道」も繋がったような気がした(それは、俊徳丸の「傷」と水俣の「傷」とのリンクとも思えた……)。

▷◇水俣を題材に決め、書物や現地でリサーチをする中で、頭に響き続ける何かがあった。

「おまえの制作はな、環境の破壊や人々の犠牲の上にあったことやわな。それわかってんのんか?」(声として、語として、大阪弁化するとこうなる)

その通りだ。美術作品と称して、プラレールや塩ビパイプ、養生シートや電子機器など、様々な工業製品を遊び半分、いつも扱っているわれわれは、いったい何をしてきたのか?そして「チッソはわたしであった」[緒方正人『チッソは私であった』(河出書房新社 2020)]という、緒方正人さんの破格の境地を、自分なりにただ受け止めようとする。さらに故・杉本英子さんの、現世の菩薩のごとき究極の言葉を繰り返し思い起こし、自問する。

「国も許す。県も許す。チッソも許す」「憎んでばかりおれば、敵討ちせんならんと思っておれば、きつか。許すことにした。憎めば、きつか」「人を恨むな。人は変えられん。自分の方が変わらんば」[米本浩二『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』(新潮社 2017):以下『評伝』と表記]

▷水俣を訪れて、相思社の永野さん、小泉さん、語り部の吉永さんらから頂いた言葉や、水俣から見る不知火海の夕景に救われたこと。

「夕昏れの海に太陽の箭が莊嚴に立つように、命の内海の水脈が、天と海底とを結んで巡る日が、くるだろうか。」[石牟礼道子「海底の水脈」(『新作能 不知火』)]

▷◇「狂い」について。our sad bad glad ‘mad’ brothers/sisters……

「私の、遊女たちや、かんじん(勧進＝乞食、あるいは狂人)がかった人間を慕うくせは父の教訓のせいにはちがいない。やがて、自分もそのようになり、生涯をさまようのであろう、と思いこんで育った。」[「わが不知火」(『全集 第一巻』)]

「昨日は、狂うたなあ、みんな 一ほんに……。思う存分、狂うた……」[「狂気はもうひとつのこの世への回路でもある。」(『評伝』)]

「……足もとはよろ／＼と。げにも真の弱法師とて。人は笑ひ給ふぞや。思へば恥かしやな今は狂ひ候はじ今よりは更に狂はじ。」[観世左近 補訂『観世流特製一番本 弱法師』(檜書店 1997)]

○千里眼千鶴子の「透視」能力と、肥後琵琶の名手・田邊敬山による、一人で幾人もの声色や八人役の鳴物を演じる「八人芸」。
[坂口和子「『肥後琵琶師田邊敬山』覚書」(不知火町郷土史研究会『郷土誌 燦火 第2号』平成4年3月)。不知火町松合に住んだ二人の感知した「かなた」を思う。

◇幼い頃から敬愛していた藤子不二雄A先生が亡くなったこと。その出来事で、僕が思い描く人物像はすべて、藤子A先生風のキャラクターに占拠された。つくられた途端なつかしく、なくなった途端あたらしい出来事。ああ、僕はどうして大人になるんだろう？

*「僕らの少年時代の全てに関する、更新の続いてゆく断章」[拙著『まちがえる〜』pp.162-169] 参照。

○書物のもつ潜在力。それらが合流した集合知としての図書館は、単なる記録でも歴史でもない唯一の「出来事」を、根源的な郷愁と共に呼び戻し、再創造するだろう*。

「本は、スプーンやハンマー、鋏……たとえば車輪のような、それにまさるものをもはや想像できないほど完成された発明品と考えています。」[ウンベルト・エーコ、ジャン＝クロード・カリエール『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』(工藤妙子 訳、CCCメディアハウス 2010)]

「うちにはあまり本がなかったんですが、私が赤ん坊の時に亡くなった伯父が『書物神さま』と言われていたんですって。」[石牟礼道子「〈インタビュー〉「初期詩篇」の世界」(『全集 第一巻』)]

「図書館っていうのは本の海ですよ……海というのは自分ではとても制御しきれない巨大なものをさし示す言葉だ。」[平民金子「図書館の大海原をたゆたう」(『神戸の、その向こう』朝日新聞 2022年3年月28日)]

*「未完の書物パラモデリアーナのためのメモランダム」「未完の書物Pに関するあれこれ」[拙著『まちがえる〜』p.121、pp.140-143] 参照

○刻印された傷、傷は道であり河、河の流れは移り変わるだろう。半身不随の詩人ジョー・ブスケの語った「傷」*。

「『君の不幸の人間になれ。君の不幸の完全性と閃光を受肉することを学べ』これ以上のことは言えないし、一度も言われたことはない。すなわち、われわれに到来することに値する者になること。したがって、到来することを意志し到来することから出来事を解き放つこと、自己自身の出来事の息子になること、そして、それによって再び生まれること、出生をやり直すこと、肉の出生と訣別すること。」[ジル・ドゥルーズ『意味の論理学(上)』(小泉義之 訳、河出書房新社 2007)]

*「未完の書物Pと、そこにたゆたうパラテキストを巡る、流れゆく水としてのパラテキスト(書庫に眠る)」[拙著『まちがえる〜』pp.124-133] 参照。

○ミシェル・フーコーによって、途中で放り出された「ヘテロトピア Heterotopia: 異在郷／他なる場所／反-場所」の概念*。

「一般にヘテロトピアは、ふつうは相容れず、相容れるはずもないような複数の空間を一つの場所に並置するという規則を持つ。一つのヘテロトピアである演劇は、舞台の長方形の上に、異質の一連の場所をそっくり継起させる。」[『ユートピア的身体／ヘテロトピア』(佐藤嘉幸 訳、水声社 2013)]

*「『鳥は池辺の青樹に宿し 魚は月下の青波に伏す(五条河原の模型楽園)』アートルーム・コンセプト」[拙著『まちがえる〜』p.198] 参照。

○アントナン・アルトーの極限的な演劇理論。「器官なき身体 body without organs [BwO]」。そして耳無芳一への関心。

「ペストと同じように演劇は、あるものとないものの間、可能なものの潜在性と物質化した自然のなかに実在するものとの間を鎖でつなぐ。」[『演劇とその分身』(鈴木創士 訳、河出書房新社 2019)]

「人間に器官なき身体を作ってやるなら、人間をそのあらゆる自動性から解放して真の自由にもどしてやることになるだろう。」[『神の裁きと訣別するため』(宇野邦一・鈴木創士 訳、河出書房新社 2006)]

「魔物にみいられているのです。死霊の呼びかけに応じたのですぞ、芳一、あなたは……あなたは生命の外に出たのだ。」[「哀れな楽師の驚異の冒険」(篠沢秀夫 訳『神経の秤・冥府の臍 アントナン・アルトー全集1』現代思潮社 1971)]

○ジル・ドゥルーズの、とある空虚の話。

「デュラスにおいて、一方で声は、場所をもたない一つの物語のように現われ、そして他方で可視的なものは、もはや物語をもたない空虚な場所のように現われる。……一つの空虚が唯一の「関係要素」であり、同時に蝶番であり隙間（裂け目／亀裂）である。二つのあいだには、たえず非合理的な切断が存在している。」[『フーコー』(宇野邦一 訳、河出書房新社 2007)]

○稲垣足穂の不思議だが本質的な少年少女論。

「キタとは生命、マキニカリスはマシン、機械、からくり、仕掛、つまり宇宙博覧会の機械館という程の意味です。キタ・マキニカリスの理想は、美少年と美少女の結合の上に生まれるコバルト色の新文明です。美しい肉体は人々を惑乱に導くが、そういう目標よりはむしろ愁いなき光の美しさ、誰もが寂しさを覚えずに驚嘆し、これにあやかるとを願求するに到るような、こんな精神美こそ基調にした。」[『E氏との一タ』(『タルホ事典』潮出版社 1975)]

「異界の『もの』のざわめきに声をあたえる主体は、ことばが分離するそのはざまを生きる者として本質的に両性具有的である。」[兵藤裕己『物語の近代』]

◇▷語り物での「しんとく[俊徳丸]」や「乙姫[初菊姫]」、「さよてる姫」などのキャラクター達はそれぞれの物語をはみ出し、いつの間にか石牟礼さんの童話『あやとりの記』の少女「みっちゃん」や、『新作能 不知火』のシテ「不知火」、ワキツレ「常若」、『新作能 沖宮』のシテ「四郎」、少女「あや」らの存在と入れ替わり、そこに「岩どん」「仙造やん」「ばんばんしゃらどの」「犬の子せっちゃん」や「隠亡の尉」「夔(き)」なども加わって、過去の僕の作品群や僕自身とも合流し始めた。しまいにはあなた方とも入れ替わるのかもしれない(石牟礼さんは、実際そうして水俣の人々に成り変わり、声にならない呻きを聞き、代わりに語ったのだ)。

「たしかそのとき、三つ子の魂と、八十くらいのめくらさまの魂とが、入れ替わったのです。しかし、入れ替わったとはいっても、もとの魂を持ったまんまでたがいの魂の中に這入るのですから、ふたつの魂が重なってものを感じたり、世界を眺めたりするのです。」[『あやとりの記』]

○そのうち、全ては固有の名前や時制を失い(すなわち、匿名化した「よろぼう◇」と「されく△」となり*)、複数の物語は断片化、声と役者と舞台は分かれ、隣り合い、私語しつつ「あいだ」を保ち、さらに分解、声や色が入り乱れた「渚」における、純粋なブロック遊びとなる……

「海の声はけっしてひとりの声ではない。たくさんの声がかもしだすざわめきなのだ。」[西成彦『ラフカディオ・ハーンの手紙』(岩波書店 1993)]

「浜辺に立ちますと、……未だ生まれない『未生のものたちの世界』でもあるように思います。子供でもそう思うんですよ。」[『評伝』]

*「よろぼう」：よろよろと歩く。よろめく。倒れかかる。「されく」：歩き回る。さすらう。さまよいる。

○琵琶のリズムが刻み出す、永遠に可塑的な「ものがたり」が場に組み込まれ、彼方の大団円に向かうであろう、「あいだ」における分裂した模型的演劇。その実験。

「人類が根源的に持っている演劇的衝動」[石牟礼道子『言魂』(多田富雄 共著、藤原書店 2008)]

海と空の、少年と少女の、青と赤の、ページとページの、図書館と美術館の、アートと巷の、絵と言葉の、声とテキストの、みえる世界ときこえる世界の、物語と場所の、イメージと物体の、空想とリアル、未知と既知の、伝統と革新の、システムと逸脱の、生と死の、自分と他者の、一人と複数の、今と昔の、未来と郷愁の、発展と公害の、権力と抵抗の、悲哀と狂気の、喜劇と悲劇の、歓喜と憤怒の、よろぼう◇とされく△の、等々……それら無数の「あいだ」に到来する何か(さて、○はありえるかどうか? 「para」とはただ隣り合うこと?)。

「かなたをよむ」とは、幻の不知火の灯を探すように、まさしくそういった2項以上の「あいだをよむ」ことかもしれません。これら様々な「かなたのあいだ／あいだのかなた」を遊びさすらう、もうひとつのPがいまここに立ち現れますように……